



蛇笏晩年の憂愁

福田甲子雄

地に近く咲きて椿の花おちず 蛇笏

この句は、昭和三十一年蛇笏七十一歳のもののである。蛇笏歿後四年を経て角川書店から出版された第九句集『椿花集』の開巻第一句目に収録されている。

明治四十二年、故郷の境川村に帰り田園生活に入ってから、つねに甲斐山中の自然を中心としながら、その生活を素材に作句活動を続け、昭和三十七年十月三日の死に至るまで俳句に全身全霊を投じて生きてきた。多くの新聞は一斉に蛇笏の死を報じたが、なかでも次の紙上の文面がこころに残った。

「俳人飯田蛇笏がなくなった。哀悼にたえない。虚子のあと、俳壇の元老的存在として仰がれていたが、床の間の置物のような存在ではなかった。七十八歳とは言え過去の人というわけではなかった。それだけ、その作品が今日の俳句として、生きていたということになる。

彼の句は、正しい古格の句だ。だが、その中は新鮮な感受性が、みずみずしく流れていた。その後蛇笏より新しい試み

した俳人はいくらかも現われた。だが、それらの多くは短い一時期の賞配を博することはできても、その時期が過ぎると、たちまち色あせた。そして、相変わらず彼の句だけが新しかったのである。

たちどころに思い出す彼の名句も多い。

芋の露連山影を正しうす
極寒のちりもとどめず巖ふすま
くろがねの秋の風鈴鳴りにけり
をりととりてはらりとおもきすすきかな

その他、雄勁重厚といった独特の蛇笏俳句の世界であり、現代の俳句からは見失われた古調の張りがそこに一貫してうかがわれる。月並みな言葉だが一葉落ちて天下の秋を知るといった感じがする。彼以後の俳句が、いわゆる近代調の俳句なのだが、議論倒れの末に、独善的な、わけのわからない俳句にまで突っ走ってしまった。甲州の山中で、病床の蛇笏はそれをどういう気持ちで見送っていたか知らない。名利を断って、この一筋に賭けた仕事の、すさまじい崩壊のさまを、

眼前にする思いではなかったか。合掌（もんがら童子）」

晩年という言葉は、それぞれの人によって差異のあることは当然であるが、私は蛇笏の晩年を戦後昭和二十年以後としてみたい。句集というならば、『雪暎』『家郷の霧』『椿花集』の戦後三句集。

しかし、今回は最晩年といえる『椿花集』にしばって考えていくことにした。

前掲の椿の句は、その最晩年に入った時期を代表する作品ではあるまいか。地に近く咲く、という作者が椿の花に寄せる眼のあり処には、ただならない思いが秘められているように感じられる。上へ上へと目を移さずに地に近い位置に、目立つことなく咲く椿に蛇笏は限らない愛情をよせ、落ちず、という詠嘆をもって結んでいる。自然を通して人生のあり方、いや蛇笏俳句の精神を示しているような思いすら読後に残る。それは、自然と一体となって、甲斐山中の小黒坂で俳句に一生を賭けて来た人の晩年の思いではなかったろうか。

雲曳きて峯越しの櫻ちるはなし
薔薇園一夫多妻の場をおもふ
冬ぬくく地の意にかなひ水移る
無花果を手籠に湖をわたりけり

この諸作も同年の作であるが、椿の花と同様に艶治のかがやきの中に、俳句の完成に生涯を賭けた者の晩年の充足感をみることができる。しかも、へもんがら童子」が書いたよう

に「相変わらず彼の句だけが新しかった」という言葉を肯定する新鮮な潤いが作品にあふれている。

こくげんをわきまふ寒の嶽風
時は無縁白き敷布の肌ざはり
雪山をゆく日とどまるすべもなし
寒雁のつぶらかな声地におちず
ゆかた着のとけたる帯を持ちしまま
比良よぎる旅をつづけて盆の東風
葉むらより逃げ去るばかり熟蜜柑

昭和三十一年以後のこうした諸作を見ても晩年の句境に少しの乱れもなく、神韻とでも言うべき蛇笏俳句の求めてきたものが読む者のこころにひびいてくる。

こうした充足した境地の中で見逃してはならないのは作者の孤愁の影である。どの句の底にも作者蛇笏のこころの翳を感じるのは、七十何年を経た人生の中で、己より先立っていった愛息三人に対する思いの翳ではあるまいか。したがって、晩年に見せた艶治のかがやきの奥には、同居して孤愁の嘆きがあるのだと思った。

晩年の蛇笏愛用の木製の座机は、現在龍太愛用の机となっている。机の上には真竹を切った筆筒が置いてあり、二、三本の筆が入っている。戦後の蛇笏が、十七年間向っていた座机は、実は戦死した長男聡一郎が使用していたものだと言った。長男聡一郎は鵬生という号をもって「雲母」にも投句し

た俳人。句集『雪峽』のなかに、聡一郎戦死の報に接したときの蛇笏作品がある。長文の前書が記されているが紹介しておく。

——金剛院文聡瑞雲鶴生居士の靈に——昭和十九年一月十日、鶴生応召、同年六月北支派遣となり、河南作戦に参加、蒙疆の厚和に集合し、戦塵を洗ふいとまもなく、泉部隊（独立第十三聯隊第十一中隊）の名に於て、ヒリッピン派遣となる。これよりさき郷里の家庭へ宛て、

たたかひのころさだまる高嶺星 鶴生

の一句をそへ、その決意を簡明に一片の葉書に托した。而して釜山、下関を経て、台湾に寄港し、ひとたび呂宋嶋へ上陸の上、レイテ嶋に向ひ、軍第二回の上陸を決定した。即ちグラウエー飛行場に逆上陸して、時、昭和十九年十二月二十二日壮烈極まる死闘に散華した。

戦死報秋の日くれてきたりけり 蛇笏

前記、長男聡一郎戦死の作は、昭和二十二年のもの。その翌年には、

二月十三日、三男麗三亦外蒙アモグロンに於て

戦病死せる

春雪に子の死あひつぐ朝の燭 蛇笏

また、戦中の昭和十六年には、二男数馬の死をむかえている。

詠むにたへず詠まざらんとしてもまた得ず生涯

さなかつた一事のなかにも、そのことが鮮明に表現されていると思つた。

晩年の蛇笏の文章には、よく憂愁という言葉が使われている。昭和三十三年六月に出版された『現代俳句文学全集飯田蛇笏集』（角川書店）のあとがきを見ると、次のようなことが書かれている。

「俳壇の一部に楽しい俳句を主張する向きがあることを訊いてゐる。或る俳人は私の近頃の傾向を見て、楽しいどころかひどく愉しからざる方向をとつてゐるといふ風なことを言つてゐた。私としてそれほど強く意識してさういふ作句傾向に出てゐるわけではないけれども、併し他からさういふ風に言はれてみるとなるほど私の作句傾向は少くとも愉しくはないのが本当であらふと思ふ。なぜかならば私自身の日常が決して愉しくないからである。寧ろ憂愁といふ文字が適格であらふやうに思はれる日々の生活だからである。韻文たると散文たるととはず文学に心を打込むものの総てが誰でも晩年ともなればさうなるのではないか、とさへ私はおもつてゐるのである。さうした憂愁を心にかき抱いてゐて、心を通して生れる作品がなんで愉しげな貌をしてゐる筈もないし、内容的に愉しさが一杯であるべき筈はないのである。（後略）」

何度読んでも心を打つ蛇笏晩年の思いである。これまで歩んできた俳句道の総仕上げのような句境が、この文章には示されている。「心を通して生れる作品」これこそ蛇笏が青年期より目差してきた俳句理念である。

をただこの詩に賭する身の之をわが亡子数馬の
靈にささぐ

ふた親のなみだに死ぬ子明けやすし 蛇笏

こうした長男、次男、参男ともに青春期のただ中の死であり、蛇笏自身、晩年を迎える時期であつた。しかし、蛇笏俳句には、いささかの乱れも感じられず、すさまじいばかりの詩魂をもつて作品の展開がなされていった。むしろ悲愁の翳を作品がおびることで一段と深みを増していくのである。

この詩に賭する身の、というなかには、こうした肉親の死も、一方では糧ともして俳句文学完成のために進まなければならぬ決意がなければ、書くことのできない言葉ではあるまいか。

蛇笏は、生前に句碑というものを建てることをしなかつた。門弟からの要請をかたくなまでに拒んできた。句碑というものがもっている心根が、きっと蛇笏のいだいている文学理念とは相反するものがあつたのではあるまいか。自分自身の行動と作品が一致することで、俳句のような短文学にあつては、その理念の完成がなされると信じていたからである。自らの人生に処する行動の潔癖さが作品の上においても雄勁重厚さをもたらして、蛇笏句の完成がなされた。功なり名をなした晩年に至つても、その理念の手綱をゆるめようとはしなかつた。自ら精神の昂揚を図ることをもつて、俳句作品に自身の血潮を注ぐことができるという俳句理念の確立がなされたのである。晩年を迎えても自らの句碑の建立を許

大正七年、蛇笏はホトトギス誌上に〈靈的に表現されんとする俳句〉論を発表している。それは、信仰と情熱とが渾然一体になったところから俳句の美が生まれるという説。それから四十年を経た前記の文章を読むと、「心を通して生れる作品」という集約された蛇笏俳句の完成の世界を知ることができる。作者の抱いている精神の表出こそ蛇笏俳句が目差していた世界である。一句には、その時の作者の思いがこめられていなければ、いのちの表出はできないということだ。

ものの音沈めて深き寒の闇 蛇笏

菱採りのはなるるひとり雨の中
朝日より夕日親しく秋の蟬
山に住み時をはかなむ春北風
ひぐらしの土にしみ入る沼明り
凍てに寝て笑む淋しさを誰か知る
山中の螢を呼びて知己となす
いち早く日暮るる蟬の鳴きにけり
竹落葉午後の日幽らみそめにけり

これらの作品はすべて蛇笏がなくなる前、五年間のもの。まだまだこの傾向の作品は書き切れないほどある。しかし、最晩年の蛇笏の句境を知るうえで多くのことを語るより、こうした憂愁のしみる句を読むことの方が、蛇笏晩年の句境を知ることができるのではあるまいか。